

ふたりきりの長い夜

さくらみや

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誕生日の夜

ふたりですごす時間

それはとてもかけがえのないもので…

(2014年9月、PIXIVさまにて初公開)

ふたりきりの長い夜

目

次

ふたりきりの長い夜

9月17日、私の誕生日。

この日はマナが主催で私の誕生日パーティをぶたのしつぽ亭で開いてくれた。

マナ、あります、そして、まこぴー、亜久里ちゃん、レジーナ、エルちゃん：

沢山の人々が集まってくれて、私の誕生日を祝ってくれた。こんなに沢山の仲間たちに囲まれる誕生日は初めてで、とても嬉しかった。

そのパーティが終わるとお片付け。

マナの誕生日と同じように、私は食器の片づけをする。

マナはいいつて言つてくれるけど、なんだかやらないと気が済まない。

お皿が重なる音、水の流れる音。私は食器をスポンジで洗つていく。

と、お皿を布巾で拭くマナの視線に気づいて声をかける。

「どうしたの？」

「うん。今日の夜、六花の家に行くね」

それは毎年の約束。ふたりきりで過ごす誕生日の夜のこと。

でも、毎年のことなのに珍しく、少しだけためらうような口調。少しだけ気になつたけど、マナが約束を守つてくれることが嬉しくて、

「ええ、ありがとう」

少しだけ弾んだ声で答える。

すると、マナの表情はいつも通りに戻つていたので、私は気のせいかと思つて気にしないことにした。

お片付けが終わつたので、私は荷物を…みんなからもらつたたくさんの中のプレゼントと共に…まとめて、マナの家を出て自宅に戻ることにした。

と、そこに、大きな荷物を持つたマナが現れた。

私はびっくりして思わず声をかける。

「マナ？ どこへ行くの？」

すると、マナは少しだけ恥ずかしそうな顔をして「六花の家」と言った。

「今日、お泊りするの？」

そう尋ねると、うん、つてうなずくマナ。

ここ最近は泊まりに来ることはなかつたから珍しいと思つたけど、私は「いいよ」つて答えた。

マナは嬉しそうな顔をして私の手を握る。

「今日は六花の家に泊まつてくるね」

家中に声をかけると、マナのママの声はいいよ、つて届いて、私たちちは玄関を出た。

「最近、涼しくなつたね」

私の手を握りしめて、振りながら、道を行くマナが口にする。

細くなつた月は微笑んで私たちを見つめているよう。

その、黄色い月を私は見上げて、

「うん…でも、びっくりした。泊まるとは思わなかつたから」

私の言葉にマナは慌てたように私を見る。

マナは慌てた表情を無理に抑えて、

「うん。今日はたくさんお話したかつたから」

いつもと違う表情のマナに私は不思議に思つて見つめるけど、そうすると、いつものマナに戻つてしまう。

私は頭の中に「？」を浮かべながらも、こういうこともあるのかな、つてそのまま家へと向かつて行つた。家についてからのマナは普通だつた。

「これ、いつもの！」

嬉しそうな、そして、期待を込めた瞳で私を見つめるマナの手にはお手製のケーキ。

「Happy Birth Day Rikkai！」

そう書かれたチョコレートプレートが乗つた、ふたり分のホール

ケーキ。

「嬉しい、マナ！　ありがとう！」

その、マナの心、想い、すべてを受け取つてお礼を言う。

リビングでふたり、ケーキと紅茶で小さなパーティ。

その、とても尊く、大切な時間を過ごすことができて、私はとても嬉しかった。

小さなパーティーが終わつたら、お風呂の時間。

お客様のマナに先にお風呂に入つてもらおうと思つたら、固く拒否された。

「今日は六花が主役さんだから」

もう夜半近くだつていうのに、そんなことを言うマナを珍しいと思いつつも、先にお風呂に入る。

そして、マナがお風呂に入つている間に、私はベッドの用意をする。ベッドの上、私の枕をずらして、マナ用の枕をその横に置いて、これから的时间を想う。

いつも、いつも、マナが泊まりに来た時は沢山、沢山、お話をしても、いつの間にかとんでもない時間になつていたこともあつた。

でも、今日は水曜日。明日は学校。あまり長くならないようにして、も、結局長くなつてしまふのでしょうかね。そう思うと少し笑いがこぼれてしまう。

と、マナが階段を上がる音が聞こえてきた。

扉を開くとパジャマ姿のマナ。

「ちゃんとあつたまつた？」

私の言葉に「うん」つてうなずくマナは少しだけいつもと様子が違う。

「どうしたの？」

私の言葉にマナはいつもの表情に戻つて首をぶんぶん横に振る。私は少しだけおかしいな、と感じながらも、掛布団を上げてマナを促す。

お布団に入るマナを見送つて、私も電気を消してお布団に入つた。宵闇の中、私たちのおしゃべりは続いていた。

普段の何気ないことの会話…例えば、学校のこと、お勉強のこと、ありすやまこびー、大切な仲間たちのお話。マナも楽しそうにお話をしてくれる。

そして、私自身の話になつた。

将来の夢、これからの目標、そして、新しい歳になつての誓い…夜のせいか、暗いせいか、相手がマナだからか、私の想いは、例えば、少し恥ずかしいお話でも、するすると心から抜け出して言葉に代わる。でも、今年は違つていた。

いつもなら、沢山の応援、助言をくれるマナなのに、その口からは何も言葉が出ない。

不思議に思つて、私は言葉を止めてマナに尋ねる。おそるおそる：「もしかして、つまらなかつた？」

暗闇の中、マナの方向に視線を向けると、かすかな音をさせてマナは枕の上で首を振る。

「マナ…？　どうしたの？」

私の言葉にマナは小さな声でこう答へやく。

「なんか、六花が遠くに行つちゃつたみたいで…」

私はその言葉に少しひっくりした。

マナがそんなことを思つていたなんて。

そんな、心配をしていたなんて…

私は思わずマナを抱きしめてしまつた。

「大丈夫よ、マナ…私は決して、マナのそばから離れたりしない」

私の腕の中のマナは少し震えて、小さく丸まつて、いつものマナじやないみたい。

でも…私と同じ歳の女の子なんだつて、そういう風に思えて。

私はマナの頭を撫でながら、ささやき続ける。

「私こそ、マナと離れ離れになるのは、嫌…。ずっとそばにいてほしい…もつと、もつと、マナと一緒に過ごしてほしい…ずっと、ずっと…」

私の本心が心からあふれてマナに伝わる。

マナは顔を上げて、私をじつと見つめて、言葉を受け止める。

闇の中、震えるマナの瞳は不安なしるし？

私は安心してほしくて、もつと腕に込める力を強くする。

マナも、私の背中に腕を回してぎゅっと私を抱きしめた。

「六花…」

マナの自信なさげな声。

そんな声はマナらしくなくて、私はもう一度強く抱きしめる。

「あたしも、ずっと一緒にいたい…大好きだから」

その言葉に、私の胸が強く打つ。

それは、私も同じ気持ちを持っているから。

私もマナの耳元に唇を寄せてささやく。

「私も…マナのことが大好きなの…ずっと、ずっと、好きだつた」

嬉しさに少し涙声。

マナはもう一度私の耳元でささやいた。

「あたしも、大好き…六花…これからも、ずっと、ずっと、六花のこと

…」

マナの言葉はそこで途切れる。と、その代わりに私の耳に口づけする。

思わずくすぐつたくて声が出そうになるけど、マナはそのまま私の頬、そして、唇へとキスを繰り返す。

初めてのその感覚に私のドキドキは止まらない。

でも、くすぐつたいけれど、マナだから、私の大好きなマナだから、抵抗しようとは思わなかつた。

沢山のキスを受けて、私はとても幸せを感じていた。

「六花…愛してる」

「うん、私も…」

私のささやく言葉が唇でふさがれると同時に、マナの手が私の胸の上を滑つてゆく。

私は一瞬緊張したけど、すぐに力をほどくと、マナの愛撫への答えを伝えるように、自分から唇を重ねた。

下の鳩時計が2時を告げる。

その音を聞いたら、いつもならもう寝なくては、そう思うのだけど、

今日は違う。

私に重なる、マナの体の暖かさに、
私をたどる、マナの指の優しさに、
ずっと、身を任せていた。

この時間が永遠に続けばいいのに、

そう思いながら。